

## 王雙成 (著) 《藏語安多方言語音研究》

上海：中西書局、2012年、5+402pp.

鈴木博之

### 1 本書の構成

本書は中国青海省、甘肅省、四川省を中心に話されるアムドチベット語に関する音声、音韻、および方言学の研究書である。本書で言及される方言資料のほとんどは著者が現地調査を行い記述したもので、議論の枠組みはチベット言語学の方法論に基づいており、共時的記述と通時的分析の双方を総合させている。全8章に分かれ、これに目次、参考文献、あとがき加わる。全8章の内容は次のようである。

1. 序論
2. チベット族の言語と文字
3. アムドチベット語内部の方言分類
4. アムドチベット語各方言の音体系
5. アムドチベット語初頭子音の研究
6. アムドチベット語母音＋末子音の研究
7. アムドチベット語瑪多方言の声調の研究
8. チベット語諸方言の音声の種類

以上の各章の和訳と原文の記述の間では、言語と方言に関する認識の違いから、表現が異なっている。書評を展開するに先立って、若干の説明をしておきたい。著者は、その書名にあるように、評者が「アムドチベット語」と呼んでいるものを「アムド方言」と呼んでいる。ところが本書のもととなった著者のプロジェクトは、「アムドチベット語音声研究」(〈安多藏語語音研究<sup>1)</sup>)となっている (p.401)。それを出版段階で変更した旨が「あとがき」(pp.401-402)に記述されている。言語と方言と

<sup>1</sup>本稿では、原文の漢語の名称・用語を引用するとき、地の文との混同を避けるため、〈〉でくくって示す。日本語の用語などは「」でくくって示す。

の境界線は言語学的基準によって引くことができない。それゆえに、さまざまな非言語学的事情によって、変更を余儀なくされることがあるのも不可解ではない。しかしながら評者は、「チベット語」と呼ばれる言語の共時的な多様性について、1言語扱いすることは不適切であり、複数の言語の複合体であるとみなすほうが言語学的視点から有意義であると考え、ならびに本書が特定の類型的特徴の束をもつ複数の方言を取り上げている事実から、本書評においても言語レベルの名称として「アムドチベット語」を用い<sup>2</sup>、末端の地域変種を「～方言」と統一して呼ぶ<sup>3</sup>。

さて、本書の構成を概観すると、大きく3つに分けることができる。第1章～第3章は主に先行研究の紹介とそれに基づく見解のまとめにあてられている。第4章～第7章は著者の共時的な方言記述に基づいた通時的・方言学的研究であり、本書の根幹をなす部分であるといえよう。その議論は多くの方言資料を用いたマクロな観点からの分析により成り立っている。第8章は著者の記述研究をもとに、アムドチベット語以外のチベット語諸方言からの資料も引用しつつさまざまな音声現象について類型的観点から検討する。本書には結論の章が設けられていないが、議論の方法上、より記述的研究に近い部分もあり、議論を通じて何らかの結論を提出する性格のものではない。すべての記述の成果そのものが結論の役割を担っているともいえる。

本書は、その参考文献(pp.381-400)および第1章～第3章の言及を見る限り、中国国内を中心に発展したチベット語方言研究の方法論を踏襲した研究であり、国外で発表されたチベット語研究は、一部の著作を除けば参照していない。著者があとがきにおいて、Sun (1986) を入手するのにいかに苦労したかを述べている点(p.402)を考慮すれば、仕方のないことかもしれない。このため、中国国外で発表されたアムドチベット語の諸研究に言及がないのは残念であるけれども、中国大陸部で発表された文献は広く参照していることから、大陸部で行われているアムドチベット語方言研究の現段階における最新の見解が本書に現れていると判断できる。

本書評では、主に第3章～第8章の内容について特に取り上げることにするが、章ごとの検討という形式ではなく、1) 方言研究の枠組みに関する諸問題の検討、2) 音表記の方法と実践に対する検討、3) 方言学的研究の方法論およびその成果に対する検討、の3点に分けて述べる。最後に本書の成果から見るこれからの研究への問題提起をもってしめくくる。

<sup>2</sup>後述するように、本書では声調をもち分節音が単純化した方言が記述されている。これは先行研究のいうアムドチベット語と相反する特徴を示している。そもそも方言群を画一的に分類できるかどうかは今なお不明な部分も少なくない。「アムド地域のチベット語方言群」を一括して「アムドチベット語」と呼ぶ立場も、研究の途上段階では必要とされる。

<sup>3</sup>本書評においては、すべての行政区分による地名および方言名を漢字で表記する。漢字は漢語の表記であるけれども、〈〉をつけない。

## 2 本書の内容の検討

### 2.1 方言研究の枠組みに関する検討

評者の目から見て本書においてもっとも強調すべき特徴は、議論を展開する際に用いる方言資料のほとんどが著者の現地調査によって得た一次資料であるということである。これまでもチベット言語学の中では、瞿霽堂(1991)、格桑居冕・格桑央京(2002)、江荻(2002)、張濟川(2009)などまとまった方言研究が複数公刊されているが、それらの中の資料は必ずしも著者自身が調査し記述したものに基ついていないものであった。議論の対象の資料のほとんどが著者自身の手になるものであることによる利点はさまざまある。これについては続く節で詳しく取り上げたい。

しかし著者が行った現地調査の詳細は、残念なことに、本書にまとまった説明がない。第1章に20数地点の現地調査資料を用いるとあり(p.7)、あとがきに20数県の県城(県政府所在地)を訪れて適切な調査協力者を探したとある(p.401)程度である。それがどのような協力者であるのか(たとえば年齢、教育程度、生え抜きか否かなど)、協力者は何人いるのか<sup>4</sup>、また、正確な調査対象の地点名(県名のみならず郷鎮村などの情報)、調査内容、調査手法など、記述研究を行うにあたって必要な情報が提供されていない。一次資料を用いて行う方言研究にとっては、数ページを割いてでも提供すべきであっただろう。

これに関連し、本書の方言名については、一部を除き基本的に県名を使用している。確かに先行研究でも県名を使用するのが慣例であり、必要に応じて郷鎮名が追加されていた。しかし議論の対象をアムドチベット語に絞った本書においても、その措置が適切であるかどうかは検討が必要であると評者は考える<sup>5</sup>。方言を県単位で扱える保証は存在しないのであるから、踏み込んだ方言研究においては方言名称もまた考慮すべき対象であるだろう<sup>6</sup>。第4章で各方言の音体系を提示するときには、郷鎮名も注記してある点(pp.54, 61, 68, 73, 78, 84, 91, 98)は評価できる。

さて、本書で提示されている著者の方言分類とその方法は第3章に記述されてい

<sup>4</sup>本書のp.63やp.75には、年齢層による発音の差異について言及があることから、一部の方言では年代差を意識して複数の協力者を探して調査したと見られる。

<sup>5</sup>カムチベット語の場合を引き合いに出すのは公平ではないかもしれないが、カムチベット語における方言の差異は郷鎮より下位レベルの行政村、さらには自然村を単位としており、その細かさで方言研究が行われている(鈴木(2012)など参照)。県名を使用しているは研究にすらならない変種もあるという点は指摘しておく必要がある。

<sup>6</sup>たとえば、《阿壩県誌》(1998)には上阿壩(各莫郷)、中阿壩(阿壩鎮)、下阿壩(安羌郷)の各方言について簡潔な言及があり、語彙形式の対比がなされている。また、定住地域の方言は牧民の方言と異なる特徴を持っていることに言及しており、先に述べた3地域を定住地方言の代表として紹介している。これらを阿壩県の方言と包括的に呼ぶことは厳密に言えば問題になってくる。方言研究の理念と研究の基本姿勢は、各文献で明示すべきである。

るが、先行研究とは一線を画している。著者はアムドチベット語を以下の4つの方言群に分類している。

- |            |            |
|------------|------------|
| 1. 北部牧民方言群 | 3. 南部牧民方言群 |
| 2. 北部農民方言群 | 4. 南部農民方言群 |

それぞれの分布は非常に入り組んでおり、著者は分布地域を示すのに地図を用いている(p.53)。アムドチベット語を4つの方言群に分けるというのは、瞿靄堂(1996)やCham-tshang Padma Lhun-grub (2009)なども行っている分類法であるが、それぞれ1つ1つの方言分類の基準が異なっていることに注意が必要である。本書の方言分類の方法(pp.45-52)には若干の、かつ大きな問題がある。中でも、アムド地域全体を生業(牧民/農民)の観点から統一して分けた点、そして通用性(相互理解度)を方言分類の根幹に反映させた点については、看過することができない。もっとも大きな問題点は、著者の言う「南部」2方言群にある。四川省内のアムドチベット語の方言分類を試みているSuzuki(2009:17)は、これら「南部」2方言群の大部分を「定住地区」「遊牧地区」「ギャロン周辺域」の3つに大きく分類している。著者の言う「南部」地域における「農民」は農業のみに従事するのではなく、半農半牧かもしくは定住しながらの牧畜に従事している。つまり重要な点は生業ではなく、生活様式と社会構造にある。この点で「北部」の事情とは異なる実態が存在する。また、瞿靄堂(1996)などが「道孚方言」と呼んで分画している方言群を、著者は「典型的なアムド牧民方言」と呼び、他の周辺の方言群と通用性が高いことを理由に「南部牧民方言」に組み入れている(pp.44-45)。この措置に評者は完全に不同意である。確かに、瞿靄堂(1996)のいう「道孚方言」は本質をとらえた分類でなく、その分布地域はさらに広い。「道孚方言」というのはSuzuki(2009:17)のいう「ギャロン周辺域」方言群の一部にあたり、子音連続組織や語彙に言語学的に示差的特徴を備えている。著者はギャロン地域に重なるように分布するアムドチベット語に不案内であることが地図(p.53)からもうかがえる。この問題は3節で詳しく述べる。

いずれにせよ、方言分類が主に言語学的特徴に基づいたものであるとはいえ、詳細な方言学的研究に先立って枠組みを提示しているのは、分類することが研究目的ではなく、またチベット言語学にはすでに一定の議論の枠組みが存在するのであるから、この配列に批判を向ける必要もないであろう。ただし、上に述べたように、アムドチベット語について通用性を分類基準にするのは多分に問題があり、著者の分類法を支持する根拠は非常に弱いということである。大まかな方言分類については、言語学的特徴に基づいて提案しているCham-tshang Padma Lhun-grub(2009)などを参照することを強く勧める。

## 2.2 音声記述に関する検討

著者は第4章において、4つの方言群からそれぞれ2種、計8種の変種の音体系と語例を提示している。記述されているのは、澤庫（合日郷）、阿柔（祁連県阿柔郷）、同仁（隆務鎮）、化隆（石大倉郷）、瑪多（黄河郷）、爐霍（宗美郷）、班瑪（灯塔郷）、壤塘（剛木達郷）の各方言である。そこに反映される音声記述と音声記号の使い方を見れば、高く評価できる点と不十分に見える点が指摘できる。

高く評価できる点として、以下のような特徴をあげることができる。

- 有声閉鎖・破擦音に関する取り扱い

第4章の記述について、瑪多方言を除いては有声閉鎖・破擦音が単独で出現しない。そのため、同方言を除いては単子音表において (b), (d) というように表記されている。この措置は方言研究において歓迎されるべきものである。先行研究の中には海老原 (2005) のように /d/ [ʰd] と分析するものがあるが、前気音の有無を表記に反映させず音体系上に組み込むという方法は優れていると評価できない。前気音の有無において対立を認められるべきであり、特定の条件下で自動的に出現すると分析するのは、本書のように方言を比較するとき大きな障害を生み出すからである。実際、周毛草 (2003) の記述する瑪曲方言は有声閉鎖・破擦音が単独である場合と有声声門摩擦音を伴う場合で対立する。

- 硬口蓋閉鎖・破擦音の記述

アムドチベット語には硬口蓋系列の阻害音が存在する方言を多く見いだせる。ただしその音価については一様でなく、Sum-bha Don-grub Tshe-ring (2011:274-276) などの先行研究では硬口蓋破擦音が記述に用いられている一方、鈴木 (2004) では硬口蓋閉鎖音が用いられている。これは実際に音価に異なりが認められるものであるが、同一の分析者が両者の系列の音を書き分けているのは、本書が初めてであるに見える。ただし、閉鎖音にも破擦音にも発音される例もあり、どちらが優勢かで記述し分けている。

- 声門閉鎖音に関する取扱い

本書における分析では、声門閉鎖音は音韻的価値がないとする一方で、子音表に (?) というように記述され、具体例をあげる際にも ? が存在する箇所には表記がある。すなわち、声門閉鎖音の存在が明示されているのであり、それを伴わない例と一線を画すという立場からの分析は方言研究上重要である。

- 末子音の閉鎖音と摩擦音の書き分け

末子音のうち、軟口蓋～口蓋垂で調音する阻害音は、閉鎖で実現されやすい方

言と摩擦で実現されやすいものの2通りがあり、どちらが主要であるかによって、表記し分けている点が重要である。また、閉鎖音の場合に、閉鎖の開放が存在するか否かについても注があるのも、これまでの研究になかったものである。

- 摩擦性母音の明示

摩擦性母音はアムドチベット語のうち著者の言う「北部農民方言群」において多く認められる。しかも摩擦性の度合いにより表記に工夫があり、たとえば [ɿ] と [iʔ]<sup>7</sup>、[ɥ] と [yʔ]、[u] と [yʔ]<sup>8</sup> といった段階の違いを設けた記述が行われている。また、摩擦性母音の来歴について検討する節も設けられている (pp.284-296)。

逆に、記述が不十分である点として、個別の音価の処理と表記があげられる。具体的には、以下のようなものをあげることができる。

- /a/と/a/

第4章で/a/と/a/の対立が認められる方言には瑪多、爐霍の2種がある。広母音に舌位置の前後で対立を形成する方言は存在するが、それを一様に/a/と/a/で表すのは、調音音声学的観点から見て、問題がある。たとえば、鈴木・イエシエムツオ(2006)には/a/と/e/の対立があり、語例をみると、/e/と本書の/a/が対応するようである。そもそも/a/と/a/の対立をもたないアムドチベット語諸方言では、/a/の音価は中舌の [A, e] であることが多い。この場合、舌位置の前後の対立がある方言では/a/とされている例がその対立のない方言では/a/と書かれていることになって、混乱を生じかねない。先述の硬口蓋閉鎖・破擦音の記述について丁寧に書き分けている一方、この2つの母音の音声記述が精密でないのは問題があるといえる。

- /ʎ/の問題

第4章で扱われる方言にはすべて/ʎ/が存在し、〈邊擦音〉「側面摩擦音」に分類されているが、すべての方言における注に、「/ʎ/の実際の音価は [ɿ]」と記述がある (pp.56, 63, 70, 75, 80, 86, 93, 100)。[ɿ] と [ɿ] は音価は当然のこと、調音様式すら異なる音であり、混同は許されない。張濟川 (2009:278-282) の指摘にあるように、中国国内の研究では表記の簡便のため、実際は [ɿ] であるものを [ɿ]

<sup>7</sup>朱曉農 (2010:246-247) ではやや異なる音標文字が定められている。同一の音に対して複数の表記法が存在することは好ましくないため、音標文字の整備が急務である。

<sup>8</sup>[ɥ] という表記にはさまざまな問題があり、鈴木 (2013) がまとめている。これらの音はアムドチベット語以外に漢語諸方言にも認められる (段亞廣 2012)。鈴木 (2013) の指摘した不備について、各言語について音価を正確に記述することが求められる。

と書いてきた経緯がある。しかし電子化の進んだ今、「表記の簡便」を理由に定義済みの音標文字を変更することは厳に慎むべきであるだろう。また、/l/と記述される音は歴史的にも注目される音であり (pp.158-160)、より一層の注意を払って音声学的側面を記述する必要があるだろう。

● /ɸ/の問題

本書に記述される方言には、「狐」という語に/ɸ/が単独初頭子音で出現する例がある (pp.57, 71, 76, 81, 225)。しかし実際に単子音で現れるかは若干疑問がある。評者の記録したアムドチベット語で、[ɸ]を含む形式をもつ「狐」という語は、たいてい [fɸ, fɸ] というように、[ɸ] に先行して有声声門摩擦音が現れ、子音連続構造をなす。音声学的な解説があれば納得できる場所である。

● /x<sup>h</sup>/の問題

本書の子音の記述は概して精密であるが、/x<sup>h</sup>/で表される音の音声実現には大きな疑問がある。というのも、評者は先行研究で/x<sup>h</sup>/と記述される音が単純な軟口蓋有気摩擦音 [x<sup>h</sup>] として実現される例をほとんど耳にしていないからである。Haller (2004) では口蓋垂摩擦音/χ/と記述され、一方鈴木 (2004)、遠藤 (2006)、更科 (2006) などの先行研究は [ʃ<sup>h</sup>, çχ<sup>h</sup>, cɣ] といった二重調音を基本とする調音を記述している。当然方言差も存在するとはいえ、著者の記述した方言すべてが軟口蓋音で二重調音を行わない変種であるとは考え難い。調音方法には一定の説明が付加されてしかるべきものである。

● 子音連続に含まれる声門摩擦音の有声性

著者は子音連続を表記するとき、第一要素が声門摩擦音か鼻音の場合、その有声性を表示せず、前者の場合は統一して h を用いて表している。たとえば、/ht/ と /hd/ のようである。確かに、多くの方言で第一要素の声門摩擦音は後続子音に有声性について一致するが、中には特定の組み合わせにおいて有声性が異なる場合もあると考えられる。たとえば鈴木 (2004) の記述では /<sup>h</sup>l/ と /<sup>h</sup>l/ が対立する。また、子音連続間の聞こえ度には無視できない異なりがある (鈴木 2005) ため、聞こえ度の低いものを上つき文字にするなど、Sun (1986) も採用している方法で記述するほうが、多くの方言を対照する場合には役立つといえる。

記述が不十分な点を見ていくと、アムドチベット語の内部で大きな問題をきたさないものが多いように評者には感じられる。ところが、これらをチベット系諸言語全体を通してみた場合、軽視できないものも含まれている。たとえば、[a, ʌ, ɜ, ɑ] のうち 3 種以上が異なる方言もあれば、[t] と [ʈ] が対立する方言もある。また、アム

ドチベット語と隣接して話されるチベット系言語 (Suzuki 2008) では、たとえば鼻音について<sup>h</sup>m, <sup>h</sup>n/と<sup>ʰ</sup>m, <sup>ʰ</sup>n/といった前気音部分の有声性の対立が認められる。

音表記における統一的基準が著者にあることはきわめて有意義で価値のあることであるが、その基準がアムドチベット語諸方言の事例のみに基づいて定められているならば、他のチベット系諸言語の事例を参照しない点で欠点にもなる。音表記に対する細心の注意と他変種への丁寧な配慮があれば、チベット系諸言語の比較言語学的な研究により多くの貢献ができる資料となるであろう。

### 2.3 方言学的研究に関する検討

本書の分析は、「初頭子音」〈聲母〉(第5章)、「母音+末子音」〈韻母〉(第6章)、「声調」〈聲調〉(第7章)に分割されて行われており、江荻(2002)、張濟川(2009)など従来のチベット言語学の分析方法と大きな異りはない<sup>9</sup>。これらの分析に先立ち、アムドチベット語の音節構造が一般化されており、C<sub>1</sub>C<sub>2</sub>VCが最大のものとなっている(pp.107-108)。これは確かにこの言語の主要な傾向を示しているが、極度に単純化されており、方言研究の立場としては容認しがたい。評者の資料によると、ギャロン地域のアムドチベット語など著者の未記述の方言にもっと複雑な構造になっているものが存在する。

初頭子音、母音+末子音の形式の議論は、蔵文の観点から見ると、決して網羅的に行われているわけではなく、先行研究で議論になった点を取り上げ、著者の調査で得られた資料からより精密に行うという方法をとっている。蔵文の組織に沿って網羅的に研究するのは余剰な部分も多い<sup>10</sup>ことを考えると、紙数に限りがある場合には、特に方言学的研究において注目できる特定の話題に特化した分析の提示のほうが効果的であろう。この点で本書は非常にわかりやすい構成をとっているといえる。

初頭子音については、単子音、子音連続に分けて概観したのち、基字にbを含む子音連続、蔵文sr、蔵文足字rの音変化、口蓋垂音の由来、有気摩擦音の音響音声学的分析、といったテーマが選ばれている。いずれも先行研究で議論されてきた話題であり、さらに深い検討がなされている。中には先行研究から得られない、典型的に興味深い例も含まれており、蔵文で両唇閉鎖音に先行する子音が存在する組み合わせの場合についてこれまででない多様な音対応が示されている(pp.171-184)。なお、口蓋垂音の由来については、著者が参考にできなかった著作にHill(2006, 2009)

<sup>9</sup>分節音について、従来の「初頭子音」「母音+末子音」の二分法にそぐわない方言が存在することを鈴木(2011)が報告している。本書はこの論文を引いているが、アムドチベット語では「初頭子音」「母音+末子音」に分割して研究を進めるのに問題はないようである。

<sup>10</sup>孔江平等(2011)が「調査表」と呼んで設計した蔵文の組織を明らかにして音の構造に従い網羅的に語彙を配列している表があるが、これを方言学的研究に利用するのは困難が多く、また意義深いともいえない。



や黄布凡(2012)があり、今後の研究では参照すべきものといえる。

母音+末子音については、通言語的な観点から母音の長短に関する特徴を概観したのち、具体的にアムドチベット語の分析に入っている。個別の話題として、二重母音、母音の舌尖化、末子音の変化があり、最後に生成音韻論的な分析を紹介し、続いてアムドチベット語の11から19までの数詞に起こる様々な音変化を分析する節が置かれている。二重母音の有無やその認定方法、さらに母音の舌尖化については先行研究でも注目されているが、著者による重要な指摘は末子音についての閉鎖、摩擦の差異、加えて閉鎖の開放・非開放の差異を記述した点にも見いだせる。生成音韻論を紹介しているのは本書の中では突飛な印象を与えるが、示唆に富む分析がある。母音の分析の全体を通して、要所要所に音響音声学的分析が提示されているのも理解を助けるものであり、評価できる。

最後に声調についてである。アムドチベット語の中でピッチの高低による超分節音的音特徴の対立を有する方言が存在するというのは著者による大きな発見<sup>11</sup>であり、本書に先立ち王雙成(2011)を発表している。本書ではpp.337-352と相当なページ数を割いて音響音声分析を行いながら、瑪多方言には高(53)・低(13)の2つの声調が対立する点を明らかにしている。p.348によると、瑪多方言以外に瑪沁県優雲郷の方言も似た声調が認められるようである。声調の歴史的、類型的背景に関してはよく検討されている(pp.328-335)ため、この分析には特に問題がないと判断できる。しかし瑪多方言の音体系(pp.78-84)の特徴を類型的観点から見ると、それがアムドチベット語に属するという言語学的根拠は見当たらない。地域的および話者の帰属意識の観点から、瑪多一帯がアムドに属することは間違いのないといえるが、言語学的特徴から、声調を有する方言群を仮定的に独立した方言群とみなすなどの配慮があってもよかつただろう<sup>12</sup>。

声調に関しては著者の音響音声学的研究によって新たな発見がもたらされたといえるが、分節音に関しては著者は多くの特徴を記録し損ねたおそれがある。それは著者の音声分析の問題ではなく、そのような顕著な特徴をもつ方言に出会っていないというのが理由であろう。確かに、評者の方言資料には上述の蔵文で両唇閉鎖音に先行する子音がある組み合わせの音対応(pp.171-184)について既知でないものが多い。一方でたとえば、蔵文頭字1に対応する要素が[l, l̥]や[l̥]といった音で実現

<sup>11</sup>かつてNagano(1980)が松潘県の方言の分析を通じて「声調を有するアムドチベット語」というカテゴリーを認めた。一方で、著者はこれに類する方言をカムチベット語に分類できると述べる(p.45)。この方言は現在ではアムドチベット語から排除することになっているが、カムチベット語でもない(Suzuki 2008, 2009)。

<sup>12</sup>瑪多方言の話される地域は、アムドチベット語の分布する地域のうち、カムチベット語の分布地域に近い地域にあたる。2種の言語の接触地域では、2種の言語の特徴を兼ね備えた方言が生まれて「方言連続体」を形成しているという見方もできる。

される方言は本書では挙げられていないけれども、評者の手元の資料では、中阿壩方言（阿壩県阿壩鎮）、切吉方言（共和県切吉郷）、莫斯卡方言（丹巴県丹東郷）など、複数の方言で認められる。ほかにも、声門摩擦音に先行する前鼻音要素が耿顯宗等(2007:523)の「環青海湖方言<sup>13</sup>」や評者の資料の中では中阿壩方言に記述されているが、本書には相当するものが記述されていない。本書の記述は確かに先行研究より詳細であるが、これをもってアムドチベット語全体における音変化の一般性を推し量るのは好ましいとは言えない。今後のより詳細な方言調査によってもたらされる新しい発見が少なからず期待されるだろう。

本書はアムドチベット語の研究書であるが、最後の第8章に簡単にアムドチベット語の類型的特徴について、他のチベット語諸方言やあるいは通言語的な観点からの短い考察が添えられている。先行する章の記述に比べれば本章の記述が簡潔に過ぎる印象を与えてしまうかもしれないが、方言研究上の要点を押さえた記述がなされている。ただし、その内容には、まさに評者が抱く最大の懸念事項が含まれている。類型的な研究は自らの一次資料のみならず他の研究者の資料も使わなければ成立しにくい。評者が2.2で繰り返し指摘しているように、音表記の異なりを実際の音声実現の異なりととらえて考察を加え、あたかも有意義な差異が存在するかのように理解することは避けるべきである<sup>14</sup>。本書第8章で鼻音の類型を議論する箇所において、著者のもつチベット語方言資料の大多数が/m/をもっているが、求吉方言のみが/n/を欠くかわりに/p/をもっていると記述している(p.361)。前後の記述を読むと、求吉方言は孫天心(2003)の資料に依拠し、著者自身は一次資料を欠いていると判断できる。評者は孫天心(2003)の記述する求吉郷麻藏郷の方言ではなく同郷徳翁村の方言資料をもっているが、その方言では[p]という音は聞かれず、[n]が通常である。そもそも硬口蓋音は/j/を除いて認められない。また、孫天心(2003)の求吉方言では/c<sup>h</sup>, ɕ, ʒ/も存在せず対応するであろう要素が/ɟ<sup>h</sup>, ʒ, ʒ/と書かれており、本書の類型的分析の中で異彩を放つ方言であるように見えてしまう(p.360)が、同様にこれらの音も評者の資料にある徳翁村の方言では[c<sup>h</sup>, ɕ, ʒ]で実現されている。方言差が認められるというよりは、分析の方法と記述の方針が異なっているのではないかと考えられる<sup>15</sup>。こ

<sup>13</sup>実際にはこのような特定の地域変種は存在しない。むしろ社会的方言の一種とみなされる。現地ではsBranag方言と呼ばれるものを指していると考えられる。

<sup>14</sup>似た問題意識について、声調の5度制表記に対する批判が朱曉農(2012:7-8)にある。本書でも瑪多方言の声調の記述では5度制(53と13)が取られているが、その適切性は検討の余地がある。

<sup>15</sup>評者は孫天心氏との個人談話(2012)において、音声表記のあり方について「国際的な習慣に則って、IPAに登録されていない文字は使わないことを音表記の基準とする」と聞いた。その基準にしたがって記述されているのならば、音声学的に前部硬口蓋音[n]であっても、/p/と記述したのではないかと推測する。ただし評者は前部硬口蓋音と硬口蓋音はすべての調音法で異なる調音位置として認められるべきであると一貫して考えている。なお、この問題については鈴木(2010)の論考と事例を十分に参考にすべきである。

のような事態に由来する本質を欠く異なりが表面化しているだけの事柄について、方言学的・類型論的観点から特段の注目を集めるような記述をするのは決して望ましいことではない。方言学的研究を進めるにあたっては、常にこのような差異が生じることに注意を払って資料を用いるべきである。

### 3 これからの研究についての問題提起

本書はアムドチベット語についてマクロ的な観点から方言学的研究を行ったものであり、読者は類似の先行研究の中で最も詳細な記述と見解に接することができる。これを踏まえて、評者は今後の研究に向けて次のような問題を提起する。

#### 方言調査地点の増加

2.1で述べた点として、著者がおそらくアムドチベット語の分布地域として正しく認識していない地域の方言の調査と記述が必要であろう。具体的な地名を列挙すると、甘肅省武威市、甘肅省甘南州卓尼県、四川省阿壩州金川県、四川省甘孜州丹巴県、同州康定県、同州理塘県、同州石渠県などになる。特に本書に金川県、丹巴県、理塘県で話されるアムドチベット語諸方言については何ら言及がないため、これらの地域にも言語学的にはアムドチベット語に属する方言を話している遊牧民が居住していることを特記しておきたい。特に評者が著者の「道孚方言」に対してとった措置を批判したように、著者のアムドチベット語の内部の方言分類に対して十分な理解が及んでいない点については、今後の研究によってより明確な言語学的基準を提出し、先行研究の主張の妥当性を明らかにする作業が必須である。

また、定住地である場合、村落ごとの差異がどれほど認められるのか、という細部についてさらに詳しい記述を積み重ねる必要がある。たとえば、鈴木(2012)では雲南省のカムチベット語という限られた地域について54地点の資料を用いて地理言語学的な研究が成立している。アムドチベット語の場合はカムチベット語のような多様性を村落の方言調査から見出すことは難しいかもしれないが、「県単位」から「郷単位」へと方言調査の方針に進展が期待できるところである。特に著者の言う「北部農民方言群」には郷単位の調査が強く望まれる。あわせて、地理言語学的観点からの研究も未開拓であるため、期待される研究分野である。

加えて、今後の重要な課題として、瑪多方言のような声調を有する方言群の分布範囲を特定し、そのような類型をもつにいたった歴史的経緯を特定していく方向で努力が積み重ねられるべきであろう。

## 妥協のない音声表記の徹底

2節の各所で不十分と指摘した諸事項について、音形式の記述に際しては妥協のない音声表記を徹底し、かつ1変種の音体系に関して簡略化を伴う解釈を最小限に行うことを強く勧める。これによりすべての変種が共通の基盤によって記述され、方言学的研究を進めるにあたり表記の異なりという障害を取り除くことができる。

ところで、著者は第4章の各方言の音体系の共時的な記述と第5章以降の方言学的研究の間に表記の差を設けている。たとえば、化隆方言の [ɣ] は音韻的に /u/ と記述するとある (p.77) けれども、第6章で例を提示する際には直接 [ɣ] と記述している (p.286-287)。音体系の提示と方言学的研究の間に異なりを設けることは1つの方法であり、この点を批判するつもりはない。むしろ音声の記述が諸方言を比較する際に重要になってくることを、本書は示している。しかし同一書物の中でこのような使い分けをするのは混乱を招くものになりうる。評者としては、[ɣ] が音韻的に無標の現れを見せるのであれば、音体系において /u/ と記述しても問題ないと考える。それによって /u/ が体系的に欠落しても、事実が体系に反映されるほうがよいだろう。

## 蔵文に一致しない特徴の研究

方言学における音声方面の研究は蔵文にほぼ依存している側面があり、孔江平等 (2011) などのように蔵文（もしくは古蔵文）に依拠することが方言の音体系およびその発展の研究にとって肝要であるという立場もある。ところが本書では蔵文では書き分けの行われていない口蓋垂音についての取り扱いおよび十分な検討があった。これは方言研究上無視してはならない視点と方法であるが、しかし多くの方言形式を詳しく見ると、細かい点で蔵文と一致しない点が認められる。これらについて考察を深めるためには、単に「初頭子音」と「母音＋末子音」に二分する分析では限界があり、音節全体を通じた検討を加える必要がある。また、音節の縮約などが音声の発展に与えた影響などもさらなる考察の余地がある。

## 語彙資料の公開

本書には語彙資料が付属していない。紙数の制限もあったのだろうと推測するが、方言研究において語彙形式が比較できる形で提示されていれば、そのデータを第三者が利用できる点で優れたものになる。チベット語とは異なるが、イ（彝）語の方言学を扱う陳康 (2010) が巻末に相当なページ数を割いて方言語彙集を付している。アムドチベット語には華侃 主編 (2002) や同書に依拠した鈴木・イエシエムツオ (2006) などの方言語彙集があり、こういった形での公開が望まれる。

## 参考文献

- 海老原志穂 (2005) 「アムド・チベット語共和方言の音韻論—農区方言と牧区方言の比較研究—」『日本西藏學會々報』 51, 83-98
- 遠藤光暁 (2006) 「子音連続と単子音の中間段階としての二重調音—青海省共和県・興海県のアムドチベット語と漢語方言を例として—」東ユーラシア言語研究会編『東ユーラシア言語研究』 第1集 324-333 好文出版
- 更科慎一 (2006) 「現代アムド・チベット語による『(乙種本) 西番館雜字』の朗読に対する音声的分析」『山口大学文学会志』 第56巻 71-100
- 鈴木博之 (2004) 「アムドチベット語チャプチャ・チェルジェ牧民方言の音声分析」『京都大学言語学研究』 第23号 145-165
- (2005) 「チベット語音節構造の研究」『アジア・アフリカ言語文化研究』 第69号 1-23
- (2010) 「硬口蓋調音の多様性とその表記—雲南省のカムチベット語諸方言の記述から見た考察—」大西正幸・稲垣和也編『地球研言語記述論集』 2, 107-113
- (2011) 〈嘎嘎塘藏語的咽化元音與其來源〉《語言暨語言學》 第12.2期 477-500
- (2012) 《雲南藏語土話中的特殊數詞形式：其地理分布與歷史來源》第二屆中國地理語言學國際學術研討會發表論文（南京）[《第二屆中國地理語言學國際學術研討會 會議論文集》 125-134]
- (2013) 「ɣ—チベット・ビルマ系諸言語における“唇齒母音”」大西正幸・稲垣和也編『地球研言語記述論集』 5
- 鈴木博之・イエシエムツォ (2006) 「アムドチベット語中阿壩[rNgawa]方言の音声分析」『アジア・アフリカの言語と言語学』 第1号 59-88
- Cham-tshang Padma Lhun-grub (2009) *A-mdo'i yul-skad-kyi sgra-gdangs-la dpyad-pa*. 青海民族出版社
- Haller, Felix (2004) *Dialekt und Erzählungen von Themchen*. VGH Wissenschaftsverlag
- Hill, Nathan W. (2006) Tibetan *wa* 'fox' and the sound change Tibeto-Burman \**wa* > Tibetan *o*. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* Vol. 29.2, 79-94
- (2009) Tibetan <ɰ> as a plain initial and its place in Old Tibetan phonology. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* Vol. 32.1, 115-140

- Nagano, Yasuhiko (1980) *Amdo Sherpa Dialect: A Material for Tibetan Dialectology*.  
Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa
- Sum-bha Don-grub Tshe-ring (2011) *Bod-kyi yul-skad rnam-bshad*. 中国藏學出版社
- Sun, Jackson T.-S. (1986) *Aspects of the Phonology of Amdo Tibetan: nDzorge Śceme Xyra Dialect*. Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa
- Suzuki, Hiroyuki (2008) Nouveau regard sur les dialectes tibétains à l'est d'Aba : phonétique et classification du dialecte de Sharkhog [Songpan-Jiuzhaigou]. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* Vol. 31.1, 85-108
- (2009) Introduction to the method of the Tibetan linguistic geography — a case study in the Ethnic Corridor of West Sichuan —. In : Yasuhiko Nagano (ed.) *Linguistic Substratum in Tibet — New Perspective towards Historical Methodology (No. 16102001) Report* Vol.3, 15-34. National Museum of Ethnology
- 《阿壩縣誌》編纂委員會編 (1998) 《阿壩縣誌》四川人民出版社
- 周毛草 [ʼBrug-mo-mtsho] (2003) 《瑪曲藏語研究》民族出版社
- 陳康 (2010) 《彝語方言研究》中央民族大學出版社
- 段亞廣 (2012) 《中原官話音韻研究》中國社會科學出版社
- 耿顯宗、李俊英、龍智多傑 [Lhun-grub rDo-rje] (2007) 《安多藏語口語詞典》甘肅民族出版社
- 華侃 主編 (2002) 《藏語安多方言詞匯》甘肅民族出版社
- 黃布凡 (2012) 〈藏緬語的小舌音〉《語言學論叢》第四十五輯 157-174
- 江荻 (2002) 《藏語語音史研究》民族出版社
- 格桑居冕 [sKal-bzang ʼGyur-med]、格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can] (2002) 《藏語方言概論》民族出版社
- 孔江平、于洪志、李永宏、達哇彭措 [Zla-ba Phun-tshogs]、華侃 (2011) 《藏語方言調查表》商務印書館
- 瞿靄堂 (1991) 《藏語韻母研究》青海民族出版社
- (1996) 《藏族的語言和文字》中国藏學出版社
- 孫天心 (2003) 〈求吉藏語的語音特徵〉《民族語文》第6期 1-6
- 王雙成 (2011) 〈瑪多藏語的聲調〉《民族語文》第3期 26-32

王雙成 (著) 《藏語安多方言語音研究》 上海：中西書局、2012年、5+402pp.

---

張濟川 (2009) 《藏語詞族研究—古代藏族如何豐富發展他們的詞匯》 社會科學文獻出版社

朱曉農 (2010) 《語音學》 商務印書館

—— (2012) 〈重塑語音學〉《音法演化—發聲活動》 3-37 商務印書館

受領日 2013年5月14日

受理日 2013年7月5日